

平成29年度学校評価報告書

【国立市立国立第五小学校】

◇ 専科教員を含め全教員で取り組む ■ 全教員で取り組むが成果確認は担任が行う 無印 担任が取り組む

学校 教育 目標	中期経営目 標(カッコの 数字は経営 方針の番 号)	短期経営目標	具体的な方策	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価									
				中間評価	最終評価												
学 び あ う 子 「 確 かな 学 力 の 向 上 (本 年 度 重 点 目 標) 」	○教員の指 導力向上 (②)	①◇返事をし、「です」「ます」「思います」「からです」など、語尾までしっかりと言うことのできる児童を育成する。	○話型を各学級で掲示し、返事から発言の最後まで、はっきりと話すことができるよう指導していく。 ○学年の発達段階に応じて、話型を増やしていくとともに自身の考えを適切に表現できるように指導する。 ○全校朝会等で呼名された際に返事をするよう各学級において指導を行うとともに、返事をした児童を称賛し、行動の価値付けを行う。	A 身に付いた児童が、70%以上 B 身に付いた児童が、60%以上～70%未満 C 身に付いた児童の増加が60%未満	35.9%	57.0% C	児童が発言している際に、教員が最後をし、語尾まで話すことができた児童が増えた。特に、低学年で大きな増加が見られた。	児童が十分考えられる時間を確保するとともに、根拠をもって考えることができるような授業改善を行っていく。また、「自分から手を挙げて発言する」と「発言内容」に分けて調査を行い、調査内容の精査を図る。	・全体的には色々な面で積み重ねの成果は上がってきていると感じる。 ・今、大学生でも「です」がいえなかったり、根拠を明確に話せない人間がいる。基礎基本として、徹底してほしい。 ・教師と子供の自己評価が違うところは、それだけしっかりと教師が取り組んでいる結果であり、教師が厳しく見ているということである。 ・鉛筆の持ち方で、一度正しく持てていた子がまた持てなくなる子がいるようである。一時的なものでなく、ずっと正しく持てるような指導を必要とする。								
		②◇自分の考えをもち、それをはっきりと伝えることのできる児童を育成する。	○考えを形成するために必要な基礎的・基本的な指導事項の定着を図る。 ○発問を工夫し、全員が挙手できるような場面を授業に取り入れる。 ○発達段階に応じた基礎的な話し方に従って、話すことができるように国語科を中心に指導を行う。 ○教師が模範を示しつつ、子供の発言を最後まで聞く姿勢をもつ。 ○児童がお互いの意見を傾聴する態度を育成する。	A 音声言語によって発言できている児童が70%以上 自分の考えを伝えられたと感じている児童が70%以上 B 音声言語によって発言できている児童が50～70% 自分の考えを伝えられたと感じている児童が50～70% C 音声言語によって発言できている児童が50%未満 自分の考えを伝えられたと感じている児童が50%未満	教師による評価 40.3% 児童の自己評価 64.5%	教師による評価 55.6% B 児童の自己評価 63.7% B	教員評価、児童の自己評価ともに増加にあるが、自己評価ではほとんどの学年で評価が下がっている。また、「考えをもつことができている」と回答した児童も減少していることから、考えをもてない児童の発言が減っていると考えられる。										
		③学年配当の漢字の読み書きと基本的な計算の仕方等を身に付けた児童を育成する。	○ベーシックドリル等を活用しながら、前学年までに配当されている漢字の読み書き、計算の練習をさせる。 ○漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。 ○算数科において、習熟度学習を進めながら、基礎的・基本的な計算の仕方を定着させる。	A 国語・算数の平均正答率が、それぞれ85%以上 B 国語・算数の平均正答率が、それぞれ80%以上 C 国語・算数の平均正答率のいずれかが80%未満	国語 78.6% 算数 78.1%	国語 85.7% 算数 81.5% B	国語については、各学年とも上昇傾向が見られる。算数については、上昇している学年と下降している学年があり、学年による差が見られた。	継続的にベーシックドリルを活用するとともに、日常の授業で既習事項を活用する授業を計画することで、既習事項の定着を図る。									
		④◇正しい鉛筆の持ち方を身に付けた児童を育成する。	○毎月第1週目は「えんぴつの1週間」とし、「ORマークをくるとまわしてなかゆびまくら」を全校で確認させ、意識の向上を図る。 ○正しい鉛筆の持ち方ができない児童には、補助具の使用を呼び掛け、正しい持ち方を定着させる。 ○正しい鉛筆の持ち方を心がけるよう、日ごろから声をかける。	A できるようになった児童が15%以上の増加 B できるようになった児童が10%～15%増加 C できるようになった児童が10%未満の増加	26.4%	33.9% C	各学年とも正しい持ち方のできる児童が増えている。10月に正しく持てていなかった児童が持てるようになったという結果が出ている。半面、10月に正しく持てていないにもかかわらず、今回の調査でも正しい持ち方できていない児童も見られた。	毎月の鉛筆週間での持ち方指導を確実に行うとともに、学期に1回は正しい持ち方のスライド等を各学級で見せ、意識付けを図る。									
		⑤「くにごメソッド」に則って、根拠のある仮説を立てることができている児童(3・4年)、学んだことを振り返って考察を書くことができる児童(5・6年)を育成する。	○仮説 ①文型(話型)を用いて表現させる。②記述の観点を与える。→学んだことを活用し、思考力・判断力・表現力を高めさせる。 ○考察 ①記述の観点を与える。②記述した文章を友達と交流させる。→学んだことを振り返り、思考力・判断力・表現力を高めさせる。	A 教師設定基準を達成した児童が10%以上の増加 B 教師設定基準を達成した児童が5～10%増加 C 教師設定基準を達成した児童が5%未満の増加	仮説(中) 63.6% 考察(高) 40.6%	仮説(中) 76.1% A 考察(高) 48.6% B	中学年では、生活経験を根拠としている児童が多く見られた反面、根拠がなかったり、循環根拠であったりする児童も多く見られた。高学年では、汎用的な考察まで至る児童は少なかったものの、ほとんどの児童が実験に正対した考察をすることができていた。	次年度も、くにごメソッドの意図や進め方について、講師を招いて研修を行う。									
		⑥◇仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない児童を育成する。	○年3回「いじめアンケート」を実施し、聞き取りを丁寧に行い、全職員で予防策・早期発見に努める。 ○人権月間に、ビデオ・DVD教材を活用し、自分や他の命を大切にしようとする児童の態度を育む。 ○5年生全員とスクールカウンセラーの面談・給食交流を実施しする。また、年度当初に「心のアンケート」を実施し、児童理解に努めるなど、相談しやすい環境を整える。 ○「わたしの行動宣言」を各学級で話し合い、いじめのない学校にしようとする態度を育む。	A いじめをしない児童が100% B いじめをしない児童が90%以上 C いじめをしない児童が90%未満	/	/	「いじめとは、どんな事か」について、共通理解が出来ていなかったため、どんな事がいじめなのかを児童も教職員も認識がたりなかった。	・来年度4月生活指導全体会で教員研修を行い、全教職員が同じ認識で児童に「いじめとは、どんな事か」指導を行って、児童自らいじめをしない態度を育てる。 ・「わたしたちの行動宣言」を教室にも掲示し、いじめについて考えるような環境を整える。									
				⑦◇自分を大切にし、自分に自信がもてる児童を育成する							○自尊感情アンケートを実施し結果を基に個々に合った自信の持たせ方を教職員全員で共有する。 ○児童の表現活動(文章・発表・作品・演奏・身体等)を交流する場を設け、友達よさを伝え合い認め合い、互いを大切にしようとする態度を育む。 ○日頃から、保護者と密に連絡を取り合い、児童のよさや、つまずきを共有し、児童に自信をもたせるようにする。	A 自己受容評価1点台の児童が0% B 自己受容評価1点台の児童が1～15% C 自己受容評価1点台の児童が16%以上	5% 19/385	5% 21/385 B	・児童の成長と共に、自分を客観視し、自分に厳しくなっている傾向がある。 ・5月に1点台の児童の半数が2月に1点台であり、自己受容はなかなか上がりにくい傾向がある。	・自尊感情は、児童自ら上げる事は困難である。教職員は、常に児童の様子を観察し、よい行いを褒め、自信を持たせるように指導していく。 ・年度早々のアンケート結果で、1点台の児童がいた場合は、全教職員でアンケート結果を共有し、褒め励まし自信をつけていくように指導を行う。	・自尊感情1点台の子供について、保護者への連絡はしてもよいのではないかと、自己評価が低い子の家庭状況との関係ももう少し明らかにしてほしい。
				⑧◇すれ違った先生や外部の方に、適切な(明確な声・一度あいさつした人には黙礼など)挨拶ができる児童を育成する。							○各学級で年間通して取り組む「あいさつ宣言」を決め、めあてを明確にする。また、毎学期末には、めあての振り返りをし、目標達成に向け、進んであいさつをする児童の育成に努める。 ○6年生のあいさつ当番の活動を活発にし、全校児童の手本となるように育む。 ○相手に聞こえる声で、はっきりとした言葉であいさつをしたり、黙礼したり、場に応じたあいさつができるように育む。	A 95%の児童が身に付いている B 90%の児童が身に付いている C 身に付いている児童が90%未満	/	/	・大人からのあいさつに素直に応じる児童に限られている。 ・会釈が分かかっていない。	・29年度代表委員会企画のクラス対抗あいさつがんばりカードであいさつが盛り上がったので、来年度も児童企画のあいさつ運動を行う。 ・会釈について、教職員がお手本を示したり、会釈の意味を伝えたりし、教職員や外部の方への会釈を促す。	
				⑨基礎的な体力の向上に努める児童を育成する。							○年間15回、木曜日の中休みに「バリアティブタイム」を設定し、クラスごとに、体力向上を図るための運動に、順次取り組ませる。 ○体育委員会による「バリアティブ」を学期に1回以上開催し、体力向上を図った運動を、ゲーム感覚で楽しみながら行う。 ○各クラスで1年間を通して行える体育的活動を「一学級一実践」として、設定する。 ○持久力を高めるために、「くにごステップス」をバリアティブタイム前に取り入れる。 ○保健日より、早寝早起き朝ごはんなどの大切さを伝え、保護者への意欲啓発を行う。 ○中休み、昼休みのどちらかは外遊びをさせるようにする。	A 休み時間に外遊びをする児童が80%以上 B 休み時間に外遊びをする児童75%以上 C 休み時間に外遊びをする児童75%未満			81.0%	82.7% A	「中休み、昼休みどちらかは外遊びをする」という約束が定着してきた。 一学級一実践において各クラスでクラス遊びをするクラスが増え、全体的に外に出る児童が増えた。
		⑩■好き嫌いをしないで給食を食べる児童を育成する。	○校長講話で、食についての話をし、残菜減量についての意識啓発する。 ○給食指導目標を基に、各学級で声かけをし、残菜減量に向け声かけをする。 ○食育月間で、発達段階に応じた食育指導を行う。 ○児童の実態に応じた残菜減量のための活動を保健・給食委員会で取り組んでいる。	A 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が80% B 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が75%以上 C 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が75%未満	88.2%	89.2% A	もぐもぐタイム(5分間静かに食べる)ことで食べることに集中することができた。 完食率チェックをすることでクラスで残さず食べることを意識できるようになった。	「いただきます」の前に、食べきれない量にできるように声掛けをしていく。									

達成状況の指標 各項目の評価指標を参照